

水環境館いきものトピックVol.12

うみ いもの 海からやってくる生き物たち

令和3年7月末は潮が高い状況が数日間続き、河口沿いの高水敷が完全に水没することもありました。そんな中、水環境館前で魚釣り(仕事!)をしていると、海に近いからこそ見られる生き物を発見しましたので、ご報告いたします。



左の写真は、勝山橋の真下で撮影したものです。ここは高水敷なので、普段はもちろん陸地なのですが、潮が満ちると水没します。この日も満潮に伴い、橋の下にも海水が入り込んでいました。しかしこの日はいつもと違い、たくさんの魚たちが泳いでいます。しかもその数は半端ではなく、ざっと200匹は超えているようです。体長はおよそ6cm。この魚は一体なにかという？

カタクチイワシというイワシの仲間です。小さな個体はちりめんじゃこやしらすととして、大きくなったものは煮干しやいりことして利用される重要な食用魚の一つです。特に瀬戸内一帯では最も一般的なイワシであり、瀬戸内地方で盛んなアナゴ漁の餌としても用いられます。イワシの仲間は天敵から逃れるため群れで泳ぐ習性があり、今回は群れごと橋の下に入り、潮が引いて出られなくなったようでした。



同じ場所では小さなアオリイカも見ることができました。今年の初夏生まれでしょうか？ まだまだ可愛いサイズです。イカやタコの仲間である「頭足類」は通常、低塩分を避ける傾向があるため河口で見ることができませんが、この日は表層付近まで海水と同じくらいの塩濃度だったために、網ですくえるほど浅い場所にも出現していました。また、こちらも紫川ではあまり見られないヒラスズキという魚もカタクチイワシを追いかけてか、たくさん見ることができました(写真はありませんが爆釣でした!)。また、陸上にもたくさんの干物と化したイワシが大量に打ちあがっていましたが、翌日様子を見ると跡形もなく無くなっていたので、おそらく鳥や猫などに食べられたのでしょう。カタクチイワシにとっては、人工構造物に遮られて捕食されているため不憫ではありますが、イワシの仲間は、海洋を中心とした生態系の基盤の一つともいえる、重要な被食者(肉食生物に食べられる側の生物)でもあります。これらの生き物がたくさんいるからこそ、多くの生き物が生きていけるわけで、その連鎖を垣間見た一幕でもありました。この時、勝山橋には多くの人が歩いていましたが、この命の営みに気づいていた人はいないようで、橋の下に目を向ける人はいませんでした。意外なほど身近な場所でこのような壮大で怖い現象が起きることもあります。うつむいてしまいがちなこの時代、どうせうつむくのならば足元の命にも目を向けてみてください。

